

# 『国譲りは関東で繰り広げられていた』

たかみやしんじ

## 序章 東国三社の不思議

東国三社とは、鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）、息栖神社（茨城県神栖市）そして香取神宮（千葉県香取市）の三社のことである。特に、香取・鹿島の両神宮については創建時に神宮と呼ばれており、他には伊勢神宮のみであり格式の高い神社とされている。江戸時代には「下三宮参り」と称して、関東以北の人々が伊勢神宮参拝後に、これら三社を巡拝する慣習があったという。

この三社を有名にしているのは、鹿島神宮の主祭神がタケミカツチ神、香取神宮の主祭神がフツヌシ神そして息栖神社の主祭神が岐神（くなど、ふなど）であり、これらの神が天照大神に高天原から派遣されて、地上を譲るよう迫った記紀の「国譲り」神話に登場するからであろう。しかしながら、遠い出雲の地で繰り広げられる「国譲り」の交渉に、何ゆえに関東から交渉部隊が派遣されなければならなかったかということが、今ひとつ理解し難いのである。この疑問に答えるように、息栖神社には、天を飛んで神々を乗せて運ぶ天鳥船命も祀られているのだが、付け焼刃の感が否めない。このような説明が、逆に記紀は真実を伝えていないことを白状しているのではなかろうか。

「四方拝」と呼ばれる皇室の私的な行事がある。元旦の早朝、今上天皇が皇居内において神々などを拝礼する。まずは伊勢神宮、天神地祇、そして神武天皇陵、先帝三代陵（明治天皇・伏見桃山陵、大正天皇・多摩陵、昭和天皇・武蔵野陵）、続いて、武蔵国一宮（氷川神社）、山城国一宮（賀茂別雷神社・賀茂御祖神社）、石清水八幡宮、熱田神宮、常陸国一宮（鹿島神宮）そして下総国一宮（香取神宮）とされる。

この「四方拝」、平安時代初期の嵯峨天皇の御代に宮中で始まったとされている儀式であるが、現在のやり方は明治時代に「四方節」と呼ばれた国の行事として行われていたものを踏襲しているものと言われている。この中で鹿島神宮や香取神宮が礼拝の対象にされているのは、矢張り、記紀にある「国譲り」の段の記述が重視されているからであろうか。

東国三社はいずれも利根川下流域に鎮座するが、古代この付近は「香取の海」という

内海が広がっていたと言われる。三社はその入り口にあたり、鹿島神宮・香取神宮は大和朝廷の東国開拓の拠点として機能していたのではないかと推論されている。又、一説によると三社は富士山からみて東、即ち日の出の方向にあたり、三社はこのことを意識して創建されたのではないかというのである。富士山といえば、秦始皇帝の密名を帯びて渡来した徐福一行が想起される。彼らは富士山麓に居住し、富士山を蓬莱山として崇めたといわれている。そこから見た東の日の出の方向に鎮座する三社は徐福一行と何らかの関係があるのだろうか。

本稿では、これら三社を切り口として「国譲り」を見つめなおしてみたいと考えているところである。そこで、今後の論述にも関係すると思われるので、以下に三社の概要を記述しておきたい。

#### イ) 鹿島神宮

鹿島神宮は茨城県鹿嶋市に鎮座する。延喜式神名帳に記される式内社。常陸国一ノ宮である。近代社格制度では官幣大社、現在は神社本庁の別表神社である。主祭神はタケミカツチ神とされる。

タケミカツチ神は、記紀において色々な場面で登場するが、矢張り「古事記」の出雲「国譲り」の交渉に登場する神話が著名であろう。又、「日本書紀」では天孫降臨に先立つ葦原中国平定において、経津主神（フツヌシ）と共に活躍した。しかしながら、このように記紀に描かれるタケミカツチ神であるが、鹿島神宮に関する言及がないためタケミカツチ神と鹿島神宮との関係は明らかではないのである。

一方、「常陸国風土記」では鹿島神宮の祭神を“香島の天の大神”と記す。この大神は天孫の統治以前から天から降ったとし記紀の説話に似た伝承を残すも、この大神がタケミカツチ神であるとの言及がない。日向国に降りたのが徐福一行だとすれば、ここ常陸国に降りたのも徐福一行であったのであろうか。

鹿島神宮は常陸国鹿島郡が神郡（しんぐん・かみのこおり）、即ち律令制下において郡全体を神社領とすることが定められていた。因みに全国の神郡は他に、伊勢国度会郡・多気郡、安房国安房郡、下総国香取郡、出雲国意宇郡、紀伊国名草郡であり、いずれも軍事上・交通上重要地であったとされる。又、鹿島神宮には鹿島使と称する朝廷からの勅使が毎年派遣されていた。伊勢・近畿を除く地方神社への定期的な勅使派遣は鹿島・香取の他は宇佐神宮しかなく、極めて異例なことと言われる。

鹿島神宮は藤原氏からの崇敬も特徴の一つといわれる。「常陸国風土記」によると常陸国内には藤原鎌足の封戸が設けられていた。鎌足神社（鹿嶋市）は藤原鎌足の出生地と伝えられる。更には、藤原氏の氏神社として創建された春日大社（奈良県奈良市）では、鹿島神が第一殿、香取神が第二殿に祀られ、藤原氏の祖神はそれらの下位の第三殿

(天児屋根命)、第四殿(比売神)に祀られているという。

#### ロ) 香取神宮

香取神宮は千葉県香取市に鎮座する。延喜式神名帳に記される式内社である。下総国一ノ宮。近代社格制度においては官幣大社、現在は神社本庁の別表神社である。主祭神は経津主大神(フツヌシ)である。

経津主大神は先にも記述のとおり、「日本書紀」では天孫降臨に先立ち葦原中国平定においてタケミカヅチ神と共に活躍した。このことから理解されるように、香取神宮は鹿島神宮と対の関係にあると言われる。鹿島神宮の本殿が北面し、香取神宮の本殿が南面していることからそのように言われるのである。そして、この対の関係から、上記の鹿島神宮で記述した特徴・特筆事項は両社に共通することなのである。

社伝では、初代神武天皇十八年の創建と伝えられるが黎明期については明らかではないとされる。鹿島神宮と共に大和朝廷の東国支配の拠点として機能したとされるため、そのように伝えられるのだろう。しかしながら、社名の“かとり”は、“かじとり”からきているという説があり、航海神の一面が窺かれる。因みに鹿島神宮も、船をとめる杭を打つ場所を意味する“かししま”を社名の由来とする説があるという。

この香取神宮、既に記述のとおり千葉県香取市に鎮座する。下総国香取郡である。これに対し、鹿島神宮は茨城県鹿嶋市に鎮座する。常陸国鹿島郡である。当時の国境がどこであったかは明確ではないが、両社が別の国に創建されたとすれば、そこには何かしらの大きな力が働いたことが読み取れるのである。

#### ハ) 息栖神社(いきす)

息栖神社は茨城県神栖市に鎮座する。国史見在社である。近代社格制度においては県社である。主祭神は久那戸神(くなどのかみ、岐神)である。社伝では、鹿島神・香取神による葦原中国平定において、東国への先導にあたった神という。

この息栖神社、主祭神は上記のとおり久那戸神であるが、相殿神として「天鳥船命」を祀る。「古事記」では建御雷神の副神として葦原中国平定に赴いたと記述される「天鳥船命」である。そして、「日本書紀」では葦原中国平定において先導役を務めた岐神である。社伝が真実とするなら、このような重要な神を祀りながら、式外社という位置づけは理解しがたいのである。

又、相殿神として「住吉三神」をも祀るのである。これに呼応するかのよう、社伝では第十五代応神天皇の時に日川(につかわ、神栖市日川)に創建されたという。その後、大同二年(807年)に藤原内麻呂によって現在地に移転したという。岐神を祀りながら、何ゆえに「住吉三神」を相殿神として祀らねばならないのか。しかも、応神天

皇時代の創建とされているのは主祭神の活躍時代と時代に隔たりがあると思われるので、その関連性の理解に苦しむところである。

更には、息栖神社には「忍潮井」（おしおい）と呼ばれる二つの井戸がユニークである。井戸は「男瓶」、「女瓶」という二つの土器から水が湧き出ているというが、社伝では神功皇后三年に造られたと伝えられているという。これについては「常陸国風土記」に祭祀集団の卜部氏（うらべし）が井戸を掘ったという記述があり、何かしらの関連を想像させられる。卜部氏は「太占」（鹿の肩甲骨を焼いて、その模様で占う）に関係した古代氏族とされる。

## 第一章 縄文・弥生の関東

本稿では、「国譲りは関東で繰り広げられていた」ことを論証しようとしている。そして序章では、国譲りに深く関わっていたと考えられる記紀に描かれる神々と祀られている神社について概論したところである。本章では、縄文時代から弥生時代の関東地区の状況についてお浸ししておこうと考える。

### 第一節 縄文時代と縄文の海進

縄文時代は、紀元前1万3000年前から紀元前約800年前位の期間、日本列島で発展した時代であり、世界史では新石器時代に相当する時代とされる。石器時代と縄文時代との違いは、土器の出現や竪穴住居の普及、貝塚の形式などがあげられる。又、縄文時代の終わりについては、地域差が大きいものの定型的な水田耕作を特徴とする弥生時代の登場を契機とするが、その年代については、紀元前数世紀から紀元前10世紀までで多くの議論がある。又、土器型式上の区分から縄文時代は、草創期（紀元前1万3000年～1万年）、早期（紀元前1万年～5000年）、前期（紀元前5000年～3500年）、中期（紀元前3500年～2500年）、後期（紀元前2500年～1300年）、晩期（紀元前1300年～800年）に区分されている。

陸地の沈降又は海水準の上昇によって海岸線が陸地へ前進することを海進というが、「縄文の海進」とは縄文時代前期に地球温暖化がピークとなり、日本で発生した海水面の上昇のことをいう。この頃の関東平野の海面は現在より2～3メートル高かったとされており、海はかなり関東平野の中に入り込んでいたとされている。

さて以上のように、縄文時代は1万年を超える長い期間ゆっくりと時が流れたのであるが、その中でも前期から中期（紀元前5000年～2500年）にかけて最も典型的

な縄文文化が栄えた時期とされている。そして、この時期には日本列島に大きく分けて9つの文化圏が成立していたと考えられている。

イ) 石狩低地以東の北海道

エゾマツ・トドマツなど針葉樹が優勢な地域。トド・アザラシ・オットセイなど寒流系の海獣が豊富で、捕獲する回転式離頭銚（もり）が発達した。

ロ) 北海道西南部及び東北北部

落葉樹林帯で、ナラ・クルミ・クリ・トチノキといった堅果類の採集が行われた。海獣捕獲も行われたが、カモシカやイノシシなどの狩猟も行われた。

ハ) 東北南部

動物性の食料としては、ニホンシカ・イノシシ、海からはカツオ・マグロ・サメ・イルカを主に利用した。沖合いに暖流が流れるので海獣狩猟はなかった。

二) 関東

照用樹林帯の植物性食料と内湾性の漁労が特徴。特に貝塚については日本全体の6割がこの文化圏のものである。陸上ではシカ・イノシシ、海ではハマグリ・アサリを採取、スズキ・マグロも食した。土器を錘（おもり）とした網による漁業を行っていた。

ホ) 北陸

シカ・イノシシ・ツキノワグマが狩猟対象であった。植生は落葉広葉樹（トチノキ・ナラ）で、豪雪地帯のため家屋は大型化した。

ヘ) 東海・甲信

狩猟はシカ・イノシシで、植生は落葉広葉樹であるがヤマノイモ・ユリ根なども食用した。打製石斧の使用も特徴の一つである。

ト) 近畿・伊勢湾・中国・四国・豊前・豊後

狩猟はシカ・イノシシで、植生は落葉広葉樹に照葉樹（シイ・カシ）も加わる。漁業面では切目石錘を使った網の使用が特徴である。

チ) 九州（豊前・豊後以外）

狩猟対象はシカ・イノシシ。植生は照葉樹林帯。最大の特徴は多島海を舞台にした漁労であった。結合型釣り針や石鋸（のこ）が特徴的な漁具であった。

リ) トカラ列島以南

植生は照葉樹林帯。動物性たんぱく質としては、ウミガメ・ジュゴンを食用とした。漁具としては貝殻を網の錘に用いた。

これらの文化圏は、縄文文化という一つの文化圏内で、地域環境条件に適合して発展していたと考えられる。それは、近畿地方などの切目石錘が関東の土器の錘が伝播したものと考えられていることや、新潟県糸魚川の翡翠勾玉が青森県「三内丸山遺跡」で、また北海道南部において出土されていることから、地域間の交流が広い範囲で行われて

いたと考えられるからである。

次に、縄文時代の植物栽培についてである。明治以降長い論争が続いているようであるが、縄文時代に植物栽培は行われていたようである。鳥浜貝塚（福井県）の前期の層から栽培植物（アズキ・エゴマ・ウリ・ヒョウタン）が検出されている。又、九州や東日本の後期・晩期の遺跡ではその遺物から焼畑農業が行われていたものと考えられている。稲作についても、熱帯ジャポニカが南西諸島から伝播していた。そして、焼畑農業により豆類、ソバなどと混作により栽培されていたのではないかとされている。

最後に縄文時代の関東地域の状況を纏めてみると、関東平野や房総半島は相当部分海であり、高台や丘陵に多くの縄文遺跡が残されている。そして、その海辺には貝塚が多数残されている。このようなことから、縄文時代の関東地区は、陸の恵み（植物性食料やシカ・イノシシ）に加え海の恵み（貝類やスズキ・マグロ）があり、比較的豊かな生活が営まれていたのではないかと考えられるのである。

## 第二節 人の居なくなった弥生の関東

弥生時代の時代区分については従来多くの説があるが、国立歴史民俗博物館の研究グループが弥生時代の開始時期を大幅に繰り上げるべきであるという説を提示している。これによると、弥生時代早期が紀元前1000年～800年、前期が紀元前800年～400年、中期が紀元前400年～紀元50年、後期が紀元50年～紀元250年とされている。

現代では、水稻農耕技術を安定的に受容した段階以降を弥生時代とする考え方が定着している。この考えに立てば、北九州地域などでは水稻農耕技術を伴う社会が成立していたとされ、従来「縄文時代後期後半」とされてきたこの段階について「弥生時代早期」と呼ぶようになってきているのである。

しかしながら、国立歴史民俗博物館は同時に、紀元前1000年頃九州北部に発した水田耕作が約800年かかって日本列島を東漸したという説を展開した。これによれば、瀬戸内海西部までに200年、摂津・河内までに300年、奈良盆地までに400年、中部地区には500年、南関東には600～700年、東北には500年かかったという推定がされているのである。とすれば、縄文時代・弥生時代という時代区分もなかなかややこしいことになるが、割り切って、一番早くにその時代の特徴が現われた時をもって最初とするということであろう。

「弥生」という時代名称は、明治17年（1884年）東京府本郷向ヶ岡弥生町の貝塚で発見された土器が弥生式土器と呼ばれたことに由来するという。しかしながら、実際には遠く北九州では既に弥生時代は随分前から始まっていたのである。

さて、関東地区では縄文後期から弥生初期にかけての寒冷化の影響で、大きな人口低下が起こったとされている。縄文時代の関東は第一節で記述のとおり、漁撈と採取生産が豊富で東日本の中でも人口の多い地域であった。しかし、漁撈への依存度が高かったことが、今度は寒冷化による「海退」や、植生の変化の影響を大きく受けることになる。又、その頃（紀元前900年頃）発生した富士山の東斜面での大規模な山体崩壊は泥流が御殿場周辺から東は足柄平野へ、南は駿河湾へ流下したという。このことは、関東の縄文人が南下する道を閉ざされたことを意味しないだろうか。

では、「海退」によって東への道がなくなり、富士山の泥流によって南への道がなくなった関東の縄文人はどうしたのであろうか。西には山しかない。とすれば、漁撈の術を頼りに北へ向かうしかなかったのではなかろうか。

弥生時代の遺跡分布から、関東地方の人口密度は弥生中期（紀元前400年～紀元500年）まで低いままであったと考えられている。しかし、普通に考えれば大陸からの渡来人が関東平野に目をつけ、そこに稲作地帯を形成し弥生の大集落ができてよさそうである。しかしながら、上記のとおり関東に稲作が伝播するには600年かかったのであった。しかも東北より100年も遅いのである。これは何故であろうか。一説には、関東平野が「黒ボク土」というやせた土壌であり、稲作に不向きであったため渡来人の寄り付きや稲作が遅くなったというのである。渡来人の寄り付きが遅かったのは、「黒ボク土」がその理由だったのであろうか。これについては、第三章においてもう少し詳しく検討してみたいと思う。

## 第二章 渡来人の伝播

第一章において、関東地区の縄文時代と早期から前期あたりの弥生時代について概観してみた。この時代の関東地区は外国人の渡来の影響などは余りなく、縄文人が比較的豊に暮らしていたものと考えられる。しかしながら、同じ頃北九州から山陰・北陸では徐々に渡来人が現われ、その土着による影響が出始めていた。本章ではそれらの渡来人とその関東地区への伝播について記述してみたい。

### 第一節 弥生時代を形成した四つの渡来

弥生時代早期から前期くらいまでは稲作文化の渡来中心のもので、古代社会の変化も比較的穏やかなものだった。それまでの小集落から200～400人位の中集落が形成されていった。そして、その頃の渡来は地理的条件などから、韓半島からの渡来が中心

だったものと考えられる。渡来ルートは対馬・壱岐島を経由した北九州地区へのものと、隠岐島を経由した山陰から越国あたりへのものと二つのルートが想定される。しかしながら、渡来した稲作文化は急速には日本全国に広がらなかった。縄文人は食糧事情が悪くなかったため、それほどの必要性がなかったのだろうと言われるのである。そして、弥生時代中期くらいから急速に全国に伝播してゆく。それは、金属器や祭祀の文化が入ってきたからだろうと言われるのである。

#### イ) 呉の流民の渡来

中国・春秋戦国時代、周が滅んで秦が興るまでだから BC770 年から BC221 年までを指す。この頃、揚子江下流域に興った呉と越が抗争していた。呉は太伯の立てた国であるが、BC473、越王勾踐（こうせん）によって滅ぼされる。この時、呉の人々は越の支配下にある南方へは逃れる道がないので、持ち前の海運力を活かして北へ逃れるのである。保有する全ての船に食料や財宝・武器などを積み込んだ。そして、王族・貴族、軍隊・技術者の順に船に乗り込んだ。一般の民も船があればこれに同調した。

北へ逃れた一行は古来交流の履歴があった日本の九州地区を目指す。日本の水田で作られている稲（温帯ジャポニカ）の遺伝子は長江流域で広まったもので、特に九州から本州南部にかけて栽培されている。韓半島で栽培されている稲にはこの遺伝子がないことから、日本の稲作文化は韓半島を経由しないで中国から直接もたらされたことを示しているというのである。

呉の人々は稲作に適した地、北九州地区に上陸した。そして、北九州の原住民と融合し建国を進めていく。そして、遂には「奴国」を興し、AD57年、後漢光武帝から金印（「漢委奴國王印」）を賜り、盟主の座を勝ち取るのである。

（中田力氏「日本古代史を科学する」より）

#### ロ) スサノオの出雲

スサノオは北方系モンゴリアンで、古代の中国や朝鮮半島での度重なる戦乱に疲れた沸流国（ふるこく）の一族が出雲（島根県東部宍道湖周辺）に移住した子孫で、出雲沼田の豪族布都の子として BC188 年頃に生まれたとみられる。須我神社縁起によれば、出雲で横暴を極めていた清田（島根県雲南市）の製鉄豪族オロチを倒し、虐められていた稻田の娘、櫛稻田姫を娶り須賀の地に館を構えたという。

スサノオは父から受け継いだ稲作や製鉄技術の人々に指導し、庶民の生活安定に寄与したことなどから、BC159 年頃出雲王に押されることとなる。そして、出雲・隠岐を 186 部に分けそれぞれに族長を置き統治させていた。又、朝鮮半島との交易ルートを確保するため、壱岐・対馬を出雲に加盟させ半島の先進技術を導入していたとみられる。（山下重良氏「日本人の先祖と建国黎明期に活躍した人々」より）



## ハ) 第二の呉の難民の渡来

上記の呉を滅ぼした越であるが、BC 334年楚(そ)によって滅ぼされてしまう。この時越の王族・貴族達は海路南下し、現在の福建省の地に閩越(びんえつ)を建てた。楚に滅ぼされた時の越は、もともとの呉の民と越の民を支配していた。そこに文化の異なる楚の統治が入る。もともとの呉の民は越の民と南に向かう訳にはいかない。そこで、越の文化で育ったもともとの呉の民は、呉の滅亡時と同じように北へ向かうのである。そして、着いた先は山陰、出雲の地であった。

出雲古来の文化を表すとされてきた銅鐸であるが、その銅鐸の原形と考えられる青磁の鐸が江蘇省無錫市にある越の貴族の墓から出土した。又、浙江省紹興市で発見された勾踐(こうせん)の父、越王允常(いんじょう)の墓と思われる印山越王陵の合掌形の木槨墓は、殆ど大社造りを地中に埋めたような姿をしているのだという。これらのことが示すのは、越の文化を帯同した人々が出雲に渡来したということである。しかしながら、前記のように古来の越の人々は楚に追われて南へ逃げた。となれば、越の文化に染まった元々の呉の人々が渡来したとしか考えられないのではなかろうか。

(中田力氏「日本古代史を科学する」より)

## 二) 徐福一行の渡来

550年に及ぶ長い戦乱の春秋戦国時代の後、中国を統一したのが秦始皇帝である(BC259年~BC210年)。司馬遷が書いた「史記・始皇本紀」のBC219年条によれば、始皇帝は不老不死の仙薬を求めていた。そして、東渡して仙薬を求めたいという徐福の申し出を受け、始皇帝は徐福と童男童女など数千人を海に出し仙薬を求めさせたという。

一方、日本にも徐福一行の渡来伝説が各地に残っており、確かな伝承と考えられるものは全国で37ヶ所を数えるという。和歌山県新宮市、徐福一行の永住の地と定める。佐賀県佐賀市諸富町、仙人と会い仙薬を見つける。東京都八丈島、徐福が求めていたのは“あしたば”であると伝承されている。山梨県富士吉田市、徐福定住の地といわれる。その他、宮崎県、鹿児島県、高知県、京都府、長野県、秋田県、青森県などなど広範囲にわたり伝承があるとされている。

(山下重良氏「日本人の先祖と建国黎明きに活躍した人々」より)

## 第二節 徐福一行の渡来の目的

ここで、徐福一行の渡来の目的について考えてみたい。そのことによって、各逗留地の意味合いが少し見えてくるのではないかと考えるからである。

上記の山下重良氏の論文で紹介されている「秦始皇帝と徐福を語る会」代表の山本弘峰氏の推論によれば、“徐福の渡来目的は史記に記されているような仙薬探しではなかった。始皇帝と徐福、それに秦朝の高官のみが知っていた極秘事項で、史記の編者司馬

遷はあずかり知らなかったことである。仙薬探しは表向きの口実で、徐福船団の規模や日本で不老不死の薬草が見つからなかったことから、仙薬探しが至上の目的とは考えられない。当時の秦は北方の隣国「胡」の脅威があった。これに対する作戦から東海の島日本列島への集団渡海であって、徐福は始皇帝が命じた倭の王であった。”という。

これを裏づけるように、鹿児島県いちき串木野市の徐福伝承に、“徐福は冠岳で封禪の儀を行った。”というものがあるという。秦王が泰山で封禪の儀を行って始皇帝と称した前例になったものと推論されている。西に万里の長城を築いた秦の始皇帝である。東の脅威を取り除いて北の「胡」に対峙したということであろうか。それにしても万里の長城に比べて規模が過小である。

本稿では別の推論を示したい。不老不死の仙薬の不老不死とは、始皇帝個人の不老不死ではなく、秦国の不老不死、即ち秦国の永遠の繁栄を意味する。そのための仙薬探しということである。では、その仙薬とは何であったのであろうか。それは鉄材のことであつたらう。当時すでに鉄が重要になってきていた。徐福は鉄材を探し、秦国に供給するという密名を帯びて派遣されたものと推論する。日向国、紀国、甲斐国、八丈島など火山近隣に土着するのはそれを意味するのではなかろうか。青森県小泊はもっと直接的で砂鉄が存するという。そして、それは土着を前提とした長期的なものであつたらう。それ故、多くの童男童女・工人を引き連れて渡来したのである。

土着した徐福は各地において仙薬探しという旗印は降ろさなかつた。本当の目的が露呈すれば土着がうまく行かないのは目に見えるから当然の方策であつたらう。徐福が最初に出航したのは、始皇帝即位3年、BC 219年のことだった。

### 第三節 徐福一行を追いかける出雲

第一節の口)で論じたように、須我神社縁起によればスサノオは清田(島根県雲南市)の製鉄豪族オロチを倒し、櫛稲田姫を娶り須賀の地に館を構えたのである。このことの意味するのは、スサノオ出雲では未開発であつた製鉄技術を取り込んだということである。そして、その相手は中国から技術を運んできた第二の呉の難民としか考えられないだろう。又、彼らは稲作と共に銅鐸による祭祀も帯同してきていた。こうして、スサノオ出雲では製鉄と銅鐸祭祀が展開されることになる。

山下重良氏の分析によれば、スサノオは出雲国建国の後、越・加賀・能登・長門・筑前・豊前にも遠征しこれらを連合し「和国」を創建した。更にスサノオは宇佐に拠点を構え、イザナギ日向に「和国」への参加を呼びかける。しかし、イザナギは抵抗し戦いになる。そして、敗れたイザナギは淡路島に追われる。この時、イザナギとイザナミには向津姫という娘がいた。スサノオは向津姫を娶り現地妻とするのだった。記紀にいう大日靈女貴尊(おおひるめむちのみこと)、天照大神である。

本欄(全邪馬連の投稿欄)の小稿「倭国大乱と崇神擁立は同時進行していた」でも記

述したが、邪馬台国は日向にあり、そして卑弥呼は徐福一行の渡来者の末裔であった。そして、徐福一行の渡来者として最初に日向を束ねたのは、記紀の記述からイザナギ・イザナミであったと考えられる。

さて、こうして広域に「和国」を連合したスサノオであったが、それは単なる覇権拡大だけのためだったのであろうか。スサノオには出雲による全国制覇という野望があったのではなかろうか。スサノオが「和国」を連合した頃、出雲を出て、三次から安芸に出で行った一派がいた。山を越えて吉備に向かう一派がいた。琵琶湖経由で畿内・大和に着地した一派がいた。それぞれは、どうも鉄材を求めて外に向かったようである。そして、稲作と銅鐸祭祀を帯同していたのでその伝播の役目も担ったのである。

日向の連合に成功したスサノオの次のターゲットは紀ノ国だった。次男五十猛尊らを引き連れて紀ノ国の統合に成功する。熊野三山は熊野大社（島根県松江市）から勧請されたとされる一説がそれを後押しする。紀ノ国には徐福一行が着地し住み始めていた。スサノオは徐福一行の渡来の目的を知っていたのであろうか。或いは、彼らの技術力や組織力を恐れていたのではあろうか。いずれにしろ、徐福一行は紀ノ国を追われ、更に北上する。そして、安是の湖（あぜのみなと・茨城県利根川河口）に辿りついた。「常陸国風土記」、筑波郡の段には、“筑波の県は昔、紀の国といった。昔、祖先の大神が駿河国の富士山を通った時、福慈（富士）の神に宿を請うも断られてしまった。そして、「我は汝の祖先なのに何故宿を貸さぬか」と言った。次に、筑波の山で宿を請うと筑波の神は食事を用意してもてなした。”とある。又、鹿島郡の段には、“その南に童子女の松原がある”と記され、又、当地は砂鉄の産地とされており、大いに徐福一行の渡来を示唆しているのである。

### 第三章 「国譲り」の検証

スサノオの全国制覇の野望が一番大きく現われたのは、大歳尊の「大和国」建国であろう。これについては、本欄の小稿「二つの天孫降臨は連動していた」において詳論した。又、建御名方神の山陰から越、信濃・諏訪の平定や事代主命の活躍についても推論した。これらのことも、スサノオの全国制覇の一環と考えれば、整合性がとれているのである。そして、関東地区へも信濃国のほうから、徐々に進出してきたようである。

第一章の末尾において、関東平野が渡来人の寄り付きや稲作の伝播が遅かった理由について論じた。その理由は徐福一行の土着がなかったということであろう。そして、それは関東平野に火山や鉄の臭いがなかったからではないだろうか。その結果、関東平野に稲作が伝播するのは、東北より遅れて信濃国経由で出雲族が辿り着いてからになるのである。

さて、以上のようなスサノオの全国制覇の野望であったが、スサノオが没した後（BC

124年頃)、各地の様相に大きな変化が現われてくるのである。それは、スサノオ没後、向津姫の権力が強大化したことによるのである。そして、それはスサノオによって弱体化された日向を復権することだった。記紀ではこのことを、「国譲り」と描くのである。本章ではこのことを少し検討してみたい。

## 第一節 国譲り～「古事記」の記述

“オオクニヌシとスクナビコナの協力が出雲国は繁栄した。更に、オオモノヌシを大和の三輪山に祀ったことで、それまで葦が生えていただけの地上は出雲国を中心に豊かな水穂の実る国土となり、よく治まり一層繁栄していった。

これを高天原から見ていた天照大神は、「そもそも地上は父母のイザナギ・イザナミの作ったもの。国つ神より天つ神による統治が望ましい」と考え、オオクニヌシのもとへ交渉の使者(神)を派遣する。しかしながら、それらは悉く失敗してしまう。そして、遂には武力に訴えることになり、指名されたのが建御神之男神(タケミカツチ・雷神、刀剣の神)と天鳥船神(アメノトリフネ・鳥のように速く走る船の神)であった。

これに対し、オオクニヌシは二人の息子に判断を委ねる。漁に出ている事代主神(ことしろぬし)は、探し出されてあっさり国を差し出してしまう。しかしながら、弟の建御名方神(たてみなかた)は、「我が国を奪うというなら、力比べで勝負を決めてからにしろ」と抵抗する。しかしながら、力比べに負けて投げ飛ばされたタテミナカタは、信濃・諏訪湖まで逃げ追い詰められる。そして、諏訪の地から離れないことを条件にして許されるのである。

こうして、オオクニヌシは葦原中つ国を天つ神に譲ることになる。その時に、天まで届くほど高く太い宮柱を建て、千木を聳えさせた神殿を造ることを願い出て認められるのであった。“これが、出雲大社のよってきた源といわれる。

以上が「古事記」に記される出雲の国譲りの概要であるが、この国譲り幾つかの疑問がある。一つは、オオクニヌシ出雲の国譲りという概念と葦原中つ国平定という概念が混同されていることである。これを理解するには、出雲国が葦原中つ国を相当範囲で統治していたと見なければならぬだろう。それは、出雲を覇権・統治の中心とみて、オオモノヌシを三輪山に祀ったことから大和、タテミナカタを閉じ込めた信濃・諏訪、派遣したタケミカツチが後に鎮座する常陸国などがその範囲であったのか。これらの出雲の覇権が及んでいた国々を含めた「国譲り」とすることで、物語がスッキリするのではないだろうか。

疑問の二つ目は、タケミカツチはアメノトリフネまで用意されている位だから、相当遠隔地の神であったと考えられる。高天原は最初に父親のイツノオオバリの神に依頼する。だが、オオバリはひねくれ者で「安の河」の水の流れを堰き止めて道を塞いでいる

ので、中々彼に近づけない。左程に遠いところの神であると「古事記」は言っているのである。果たしてどこであったのか。「古事記」は場所を明言しないのである。

疑問の三つ目は時代のことである。スサノオの6代後の孫として誕生するのが大己貴神（おおなむじ）であった。そして、やがてスサノオの娘・須勢理毘売（すせりびめ）に入り婿となる。オオナムジはその後、スサノオの命で大国主神（おおくにぬし）と名乗ることになる。スサノオの6代孫のオオナムジがスサノオの娘と結婚できる訳がない。とすれば、国譲りを承諾したオオクニヌシとは誰であったのか。ここら辺の時代の解明は国譲りの真実に迫る鍵となろう。

## 第二節 国譲り～本稿の主張

本章の冒頭で記述したように、スサノオの没後イザナギとイザナミの娘・向津姫の権力が強大化した。そして、向津姫（記紀では天照大神）は、スサノオによって弱体化させられた日向を復権していくよう舵を切り替えるのである。

復権の最大のターゲットは大和であったろう。大和には出雲族の一派が鉄を求めて入植していた。そして、彼らを足がかりにして大歳尊が東征し、ニギハヤヒと名乗り「大和国」を建国したのだった。向津姫はこの「大和国」を日向に取り込むよう画策する。そして、末子・熊野楠日尊の子・狭野命をニギハヤヒの娘、イスケヨリ比売に入り婿させるのだった。神武天皇の誕生である。

（本欄・小稿「二つの天孫降臨は連動していた」より）

ここで少し話を戻し、タケミカヅチが国譲りを迫った相手について考えてみたい。実はこの時出雲には大物が不在であった。スサノオの息子大歳尊は大和国を建国していた。オオナムジは向津姫の子タギリヒメを娶り日向にきていた。その子・事代主も未だ日向にいた。一方、本妻スセリヒメとの子タテミナカタは信濃の平定に向かっていた。とすれば、出雲には誰もいなくなってしまうのである。このように考えると、「古事記」の国譲りの記述は事実を伝えていないようである。事代主は漁に出ているいなかった。つまり、日向にいたのである。そして、オオナムジ（ここではオオクニヌシ）ともども向津姫の意向に従うこととなる。そうすると、問題はタテミナカタのことである。以下にて、「常陸国風土記」の小さな声を聞いてみよう。

信太郡（しだ・茨城県龍ケ崎市）の段。“郡より北十里のところに碓氷がある。碓氷から西に行くと高来の里がある。昔、天地の初め、草も木も言葉を語ったところに、天より降り来たった神があった。名は普都の大神といひ、葦原中つ国を巡行し、山川の荒ぶる神たちを和めた。それを終えて天に帰ろうとして、身に付けていた巖（いつ）の鎧・矛・楯・剣・、手に付けていた玉を、すべて脱ぎ捨て、この国に残して天に昇り帰っていった。”

この頃、タテミナカタは信濃・諏訪を平定していた。そして、その後続は佐久郡から碓氷峠を超えて上野国方面に進出してきていたのではないだろうか。上野国一宮貫前神社（ぬきさき・群馬県富岡市）、下野国一宮二荒山神社（栃木県宇都宮市）、武蔵国三宮氷川神社（埼玉県さいたま市）と、界隈で主要な神社は皆祭神が出雲系である。それが上記のことを示していると考えられるのである。

山陰から越に下り、川を登り山を越えて太平洋側に進出してきた出雲であった。そして、当地常陸国で遂に日向系と激突することになる。この戦い、当時は大きな意味があった。神武によって西を征した天照大神であったが東は未だ覇権が確立できていなかった。これを確保するのがこの戦いだったのである。上記「常陸国風土記」はその戦いをさりげなく記述しているのである。この記述だけでは、出雲側の大将がタテミナカタであったか不詳であるが出雲の象徴として登場したことは考えられる。又、日向側の大将は普都の大神と言っているから、タケミカツチであったとしても良いだろう。そして、「古事記」においては、この戦いのことを題材にして日向側（高天原）が出雲を駆逐したこと、そして、タテミナカタが諏訪より東には出てこないことを約束させたことを記述したのである。

## 終章 春日大社について

「古事記」では、出雲の国譲りの後、天孫降臨があり、そして色々あって神武が東征するという流れになっている。しかしながら、これらのことは史実とは異なる記述であった。スサノオと天照大神の誓約とは、スサノオが日向に進出し向津姫（イザナギ・イザナミの娘・天照大神）を娶ったことだった。天孫降臨とは、スサノオの娘スセリヒメに婿入りしたオオナムジがタギリヒメ（スサノオと向津姫の娘）を娶ったことだった。神武の東征とは、大歳尊の築いた大和国へ狭野命が婿入りすることだった。国譲りとは、常陸国で展開された出雲系と日向系の戦いのことだった。

では何故記紀はそのような記述になるのであろうか。それは「古事記」（「日本書紀」も）が編纂された時に権力の中枢にいた藤原氏の意向に沿ったものに作り上げられたことによるのであろう。親百濟系とされる藤原氏のため、新羅系とされるスサノオ出雲を主流とする記述はありえなかった。結果、スサノオの時代は殆どが神代に追いやられることになる。又、初代神武天皇以降、二代綏靖天皇から九代開花天皇までを「古事記」の記述が乏しいことから欠史八代といい、史実ではないとする見解がある。これも又、藤原氏の意向であろう。即ち、二代以降の天皇は皇后を出雲系から迎え出雲色が濃くなっていくのである。従って、そのような治績を詳しく記述することはできなかったのであろうと推察するものである。

さて、春日大社（奈良県奈良市）である。一説では平城京に遷都した710年、藤原

不比等が鹿島神を勧請して藤原氏の氏神社としたとされる。藤原不比等は中臣鎌足の次男であるが、そもそも、藤原家は中臣鎌足を祖とする家系である。一般には、中臣鎌足は大和国高市郡藤原（奈良県橿原市）の出生で、中臣氏は神官の家系とされている。しかしながら、鎌足は父（中臣御食子）が鹿島神宮に赴任していた時に出生した可能性も指摘されている。若しそうだとすれば、そのような縁（えにし）から鹿島神を勧請して春日大社を創建したものと考えられるが、国譲りに大活躍したタケミカヅチなどとは時代が異なるし、余り関係がないのである。それにも拘らず、春日大社の第一殿に鹿島神、第二殿に香取神が守護神として祀られ、藤原氏の祖神は第三殿（天児屋根命）、第四殿（比売神）に祀られているのである。これは何を意味するのであろうか。天児屋根命は中臣氏の祖先神とされ、天岩屋では祈禱を行い、天孫降臨ではニニギに随行した。これだけでも血統書的には十分だと思われるが、更に、天孫降臨に先立つ国譲りでタケミカヅチが大活躍し、神武東征の段において、タケミカヅチが霊剣ツツノミタマを下している。このような神々が春日大社に祀られているのである。これらによって藤原氏が主張したかったことは、勢力を誇示すること以外には考えられないのではなかろうか。

了

### <お伽噺・桃太郎>

昔々のお伽話に桃太郎の鬼退治の話がある。“きび団子”から吉備（岡山県）がその地であるという説が有力である。そして、ベースに陰陽道が使われているという説がある。陰陽道では北東の方角（丑寅）は邪悪なもの（「鬼」）などが出入りする方角で鬼門と呼ぶ。この対極は南西（未申）で鬼の出入りを封じる方角である。だから、鬼は虎の皮のパンツをはき牛の角が生えている。鬼が島は鬼門の方角にあり、桃太郎の住む村はその逆の南西（未申）にある。五行の領域の「金」は果物では「桃」が配当されており、即ち「桃太郎」が南西にある村から北東の鬼が島に征伐に出かけるのである。最初に申（猿）を従える。そして順次、酉（雉）、戌（犬）を従えて鬼を退治し、金銀財宝を手に入れるという訳である。

では、順次物語を追っていくこととしよう。

場面はおじいさんとおばあさんの住む山里から始まる。これは土着系の人々を象徴しているといえよう。そこには山から流れてくる川があり、桃がどんぶらこと流れてくる。桃を割ると中から桃太郎が生まれてくる。これは、山を越えて新住民が進出してきた様子を著しているのであろう。そして、桃太郎は成長し鬼が島の征伐に出発する。即ち、新住民が新たな地で地歩を固めた。途中、猿、雉、犬と界隈の豪族を配下に置きながら鬼が島を目指す。鬼が島は有力豪族の地を象徴しており、その地では鉄の生産が行われていた。桃太郎は鉄の確保を目指していたものと推論する。その頃の金銀財宝とは何といっても鉄であったろう。鬼に金棒の金棒は後に（南北朝の頃）武器として大いに使われ

たというが、物語の時代でいえば、鉄を象徴して著わされたのではないかと思われる。

本稿の本文でも若干触れたが、初期の出雲の豪族は鉄を求めて各地に進出していった。そして、それらの人々は銅鐸による祭祀をも帯同していった。吉備国には多くの銅鐸遺跡が発掘されている。これらは出雲から伝播した可能性を否定できないのではないかと考える。「桃太郎」は全国各地に様々な内容で伝承されているようである。その根幹は桃から生まれたこと、鬼退治のことの二点に集約されるのであろう。とすればその原形は、スサノオの出雲降臨そしてスサノオによる製鉄豪族オロチ退治にあるのではないだろうか。

「桃太郎」の物語は、明治20年(1887年)に国定教科書に採用される際にほぼ現在の形のものを掲載したという。そして、それ以降これが定着したとされている。

#### <参考文献>

- |                                                      |          |         |
|------------------------------------------------------|----------|---------|
| ・オールカラーで分かりやすい<br>古事記・日本書紀                           | 多田 元監修   | 西東社     |
| ・ヤマト国家成立の秘密                                          | 澤田洋太郎著   | 新泉社     |
| ・日本古代史を科学する                                          | 中田 力著    | PHP 研究所 |
| ・眠れないほど面白い「古事記」                                      | 由良弥生著    | 三笠書房    |
| ・徐福と日本神話の神々                                          | 前田 豊著    | 彩流社     |
| ・徐福王国相模                                              | 前田 豊著    | 彩流社     |
| ・日本人の先祖と建国黎明期に<br>活躍した人々                             | 山下重良著    | WEB サイト |
| ・桃太郎伝説・陰陽五行説だった                                      | もりたたろべえ著 | WEB サイト |
| ・鹿島神宮・香取神宮・息栖神社・<br>縄文時代・弥生時代・常陸国風土記<br>徐福・春日大社・桃太郎他 | ウィキペディア  | WEB サイト |

#### <自己紹介>

- ・筆名 たかみやしんじ 1947年 長野県出身。
- ・東京都在住。
- ・「全邪馬連」入会 2015年7月。
- ・趣味 古代史愛好。高爾夫球。
- ・「全邪馬連」投稿歴

「倭国大乱と崇神擁立は同時進行していた」 2015年10月

「二つの天孫降臨は連動していた」 2016年4月